

連載コラム



みずき野と
その周辺の
植物と昆虫



第39回
木の实いろいろ (3)



もとよし ふさお
本吉 總男

2017年12月

秋から初冬にかけては、いろいろな木の实を探ることが楽しみな季節です。木々は実を成熟させ、小鳥がそれらを食べて、種子を遠くに運び、糞と一緒に地上に落とします。成熟した実をつけた木々は1年間の仕事を終えて、小鳥の来訪を待ちつつ、静かなひとときを過ごしているように見えます。

みずき野周辺で見られる木の实については、すでに本連載コラム「[第 19 回木の实いろいろ\(1\)](#)」と「[第 20 回木の实いろいろ\(2\)](#)」で紹介してきました。今回はまだ取り上げていなかった木の实について述べることにします。今回は実ができる前の花の写真もなるべく添えています。なお、本文中の説明に出てくる「両性花」、「単性花」、そして「雌雄異株^{いしゅ どうしゅ}」、「雌雄同株」については次ページの解説を参照してください。

1 シャリンバイ

シャリンバイは本州、四国、九州、小笠原、沖縄や台湾、朝鮮半島南部に分布するバラ科の常緑低木ですが、高さ4メートルに達するものもあります。暖地の海岸に多い植物ですが、公園や庭園に植えられます。みずき野では遊歩道で見かけます。

シャリンバイは5月頃に直径は15ミリほどの白い花(両性花)を咲かせます。実は10～11月頃に熟し、黒色の球形で直径1センチほどです。シャリンバイは、枝が車輪状に出ること、花が梅に似ていることから「車輪梅^{しゃりんばい}」と名付けられました。



シャリンバイの花 5月中旬 7丁目遊歩道



シャリンバイの実 11月上旬 7丁目遊歩道

2 カマツカ

カマツカは本州、四国、九州、朝鮮半島南部、中国に分布するバラ科の落葉低木ですが、中には高さ5メートルほどの小高木^{しょうこうぼく}になるものもあります。花は両性花で、直径8～9ミリ程度。4～5月頃白い花が咲き、実は11～12月頃赤く熟します。

カマツカの材は丈夫で重いので、鎌の柄に使われたことから「^{かまつか}鎌柄」と名付けられました。別名は「ウシコロシ(牛殺し)」。材を火であぶりながら曲げて輪にし、牛の鼻輪にしたので、このような別名がついたのだそうです。



カマツカ 5月上旬 本町地区



カマツカの実 12月中旬 本町地区



「両性花」と「単性花」、「雌雄異株」と「雌雄同株」とは？

「両性花」とは、ひとつの花の中に受精可能な雌しべと、雌しべを受精させる能力を持つ花粉を生産することができる雄しべが共存している花をいいます。両性花は多くの植物に見られます。サクラ、イネ、トマト、その他、枚挙にいとまがありません。それに対し「単性花」とは、雌だけの機能を持つ花(雌花)や、雄だけの機能を持つ花(雄花)のことをいいます。雌花は受精可能な雌しべを持ちますが、花粉はつくりせん。一方、雄花は雌しべに受精させる花粉をつくりますが、受精できる雌しべはつくりません。例えばクリやカキも単性花をつけます。

「雌雄異株」とは、ひとつの植物で雌花をつける雌株と雄花をつける雄株が分かれて存在する状態をいいます。したがって、雌株と雄株が比較的近くにないと、雌株に実はつきません。イチョウ、ヤマモモ、アオキ、ヒイラギや本文で述べるトベラやヒサカキなど、木(木本)には雌雄異株の植物が多くありますが、草(草本)にもあり、ホウレンソウやカラスウリはその例です。一方、「雌雄同株」とは、ひとつの植物が雌花と雄花の両方をつける状態をいいます。雌雄同株の植物は比較的少ないのですが、上記のクリやカキ、その他スギや本文で紹介するアケビなどの例が挙げられます。草本ではキュウリやトウモロコシが雌雄同株の植物です。

3 マサキ

マサキは北海道から沖縄までの日本列島と東アジアに分布するツリバナ科の常緑低木で、海岸近くに多い植物ですが、内陸でも道路沿いの植栽や生垣によく使われ、斑入りの葉のものもよく見かけます。両性花で淡緑色の小さな(直径7ミリほど)花が6~7月頃咲きます。果実は12月頃成熟し、4つに裂けて中から^{どうせきしよく}橙赤色の種子が現れます。

マサキは漢字で「柎」と書きますが、日本でつくられた漢字(国字)です。



マサキの花 7月上旬 本町地区



マサキの実 12月中旬 本町地区

4 トベラ

トベラは本州、四国、九州、沖縄、朝鮮半島南部、台湾、中国の分布するトベラ科の常緑低木で、高さは2~3メートル。暖地の海岸に多く野生していますが、内陸でも公園や道路の植え込みによく使われています。

トベラは雌雄異株^{いしゆ}で、花は4~6月に咲きます。雌花は雌しべのみがよく発達し、雄しべは貧弱で、花粉はつくりません。雄花は雄しべがよく発達し、花粉をつくりません。雌しべもありますが、受精する能力はありません。



トベラの雌花(雌しべのみが発達)
5月中旬 7丁目どんぐり公園



トベラの雄花(雄しべが発達)
5月中旬 1丁目消防署付近



トベラの裂けた実
(赤い種子が露出している)
12月中旬 1丁目消防署付近

晩秋には丸い黄緑色の実をつけ、初冬には裂けて赤色の種子を露出させます。種子はべとべとした粘液に覆われています。粘液は種子を小鳥のくちばしなどにつけて、伝搬をさせやすくしているのかもしれない。

漢語ではトベラを「海桐^{かいとう}」といい、海岸に繁る木を意味しているようです。日本ではトベラを「海桐花」と書きますが、漢語の海桐^{かいとう}に当てたものです。

日本には、大晦日にトベラの枝を扉に挟んでおくと、邪鬼を追い払えるという言い伝えから、トベラの別名をトビラノキといいます。トビラノキが変化してトベラという名が生じたと思われる。

5 センダン

センダンは、本州、四国、九州、沖縄、台湾、中国に見られますが、早くから栽培されている植物で、本州の暖地に自生しているものは、もとは栽培されていたものが広がった可能性があるようです。みずき野周辺でも庭木としてよく見かけます。センダン科の落葉高木で高さ30メートルに達するものもあるようです。

センダンの花は白～淡紫色で5～6月に咲き、雄しべは10本ほどが合着^{ごうちやく}(くっつき合うこと)して紫色の筒状になります。実は10～12月頃成熟します。直径は15ミリほどで、淡黄色です。



センダンの花 5月下旬 本町地区



センダンの実 1月中旬 本町地区
(しおれているのは撮影の時期が遅かったため)

この文は、壇ノ浦の戦いで平氏が滅亡し、源義経に捕らえられ、斬首された平宗盛(清盛の三男、内大臣)とその子清宗の首を三条河原で検非違使が受け取り、京の大路を引き回して、獄門の左の棟おうちの木にかけたことを生々しく物語っています。

以後、斬首された人の首をかける木として、棟おうちは忌み嫌われる木になってしまいます。今はそんなことも忘れられ、広い庭園や公園に、また並木として植えられ、美しい花が愛でられています。花が愛されるのは平和な時代です。

6 ミツバアケビ

みずき野周辺にアケビの仲間(アケビ科)のうち、よく見られるのはアケビとミツバアケビです。どちらもつる性の落葉樹で、他の木に巻きついて生長します。葉は複葉で、アケビは5枚の小葉しょうよう、ミツバアケビは3枚の小葉しょうようがついています。実はどちらも果肉が甘くて美味しく、アケビやミツバアケビの実を見つけて食べた経験のある人も多いでしょう。

両種ともみずき野周辺には多く、花はよく見かけるのですが、実はほとんど見ることはありません。結実のわるい植物なののでしょうか。2015年秋にみずき野3丁目東隣接地に生えていたミツバアケビの実を見ましたが、それ以後見たことがありません。

アケビは本州、四国、九州と朝鮮半島、中国に分布し、ミツバアケビは北海道、本州、四国、九州と中国に分布しています。

ここでは、ミツバアケビの花と実の写真を載せておきます。ミツバアケビもアケビも雌雄どうしゅ同株です。



ミツバアケビの花(雌雄どうしゅ同株)
3月下旬 3丁目東隣接地



ミツバアケビの実
10月下旬 3丁目東隣接地

日本では漢語の「木通^{もくつう}」をアケビと読ませています。木通の語源は諸説あって、はっきりしません。日本語の本来の意味としては、「果実が熟すると開くのでアケミからアケビと呼ばれるようになった」という説があります。

7 モッコク

モッコクは本州、四国、九州、沖縄のほか、アジア温帯、亜熱帯、熱帯に広く分布するツバキ科の常緑高木で、高さ15メートルに達するものがあります。美しく、丈夫な樹木なので、公園や庭園に多く植えられています。

モッコクは両性花をつける木と雄花だけをつける木(雄株)があります。直径1センチ程度の黄白色の花が6～7月頃咲きます。実は1センチ内外で、10～11月頃赤く熟し、その後果皮が割れて、赤い種子が露出します。モッコクは漢字で「木斛」と書きますが、その語源はわかりません。



モッコクの花(両性花) 7月中旬 中央公園



モッコクの実(まだ未熟で、さらに赤くなる)
10月上旬 中央公園



裂けたモッコクの実
(小鳥に食べられたのか種子は見えない)
12月中旬 さくらの杜公園



モッコクの種子
(実には通常4つ以上の種子ができるが、
採取できたのは2つのみ)
12月中旬 さくらの杜公園

8 ハマヒサカキ

ハマヒサカキは本州、四国、九州、沖縄、挑戦半島南部、台湾、中国に分布するツバキ科の常緑低木ですが、高さ5メートルほどの小高木になるものもあります。野生の木は暖地の海岸に多く見られますが、内陸でも庭園樹として利用され、また、みずき野では、遊歩道の植え込みに使われています。次に述べるヒサカキとは葉の形がかなり違うので、容易に識別できます。花は10～12月に咲きますが、前年の花の後についた実を一緒に見ることができます(左下の写真)。ハマヒサカキは雌雄異株いしゅの植物です。



ハマヒサカキの雌花と前年の雌花についた実 11月中旬 7丁目遊歩道
ハマヒサカキの雄花 11月中旬 7丁目遊歩道

9 ヒサカキ

ヒサカキは本州、四国、九州、沖縄や中国、朝鮮半島南部、台湾に分布するツバキ科の常緑低木ですが、5メートル程の小高木しょうこうぼくになることもあります。ハマヒサカキと同様、ヒサカキも雌雄異株いしゅの植物です。

ヒサカキの花は3～4月に開きます。実は10～12月に熟して黒くなります。

日本では神事にサカキを使いますが、サカキは関東には少ないので、ヒサカキをサカキの代わりに使うことが多いようです。スーパーマーケットなどの花売り場でサカキとして売っているものもほとんどヒサ



ヒサカキの小高木しょうこうぼく
12月中旬 山富園東斜面

カキです。ヒサカキには葉の縁にぎざぎざ(鋸歯縁)がありますが、サカキにはなく、葉を見れば容易に区別できます。



ヒサカキの雌花
3月下旬 本町地区



ヒサカキの雄花
3月下旬 本町地区



ヒサカキの実
11月下旬 本町地区



【参考】サカキ
(葉のへりにぎざぎざ(鋸歯)がない)
向島百花園にて3月中旬に撮影

参考のためサカキの葉の写真も添えておきます。サカキは漢字で「榊」または「賢木」と書きます。

万葉集には榊を詠み込んだ歌があります。また、平安文学にも榊の名がよく出てきます。しかしこの時代の榊が現代のサカキに該当するものかどうかは確たる証拠はないようです。このことについては、後述します。

源氏物語の「賢木」の巻には、光源氏が野宮を訪れる場面があります、野宮は皇女が齋宮

として伊勢神宮に仕える前の1年間、潔斎(身心を清めること)のためにこもる宮殿で、京都の嵯峨にありました。源氏がここを訪ねたのは、かつての恋人であった六条御息所に会うためでした。ここには御息所の娘(のちの秋好中宮)が齋宮として居り、母が付き添っていたのでした。御息所は嫉妬から生霊となって源氏の本妻である葵上をとり殺して以来、源氏とは疎遠になっていたのですが、源氏は未練があつて野宮を訪ねるのです。

源氏は歌とともに、サカキの枝を御簾みすの内に差し入れ、「このサカキの色のように変わらぬ心をお伝えしようと、齋垣いがき(神聖な領域を囲む垣)を越えてきたのです。そんなによそよそしくなさるとは」との申し伝えに、御息所みやすどころの返事は、

かみがき
神垣は しるしの杉も なきものを
いかにまがへて 折れる榊ぞ

この神垣かみがきには、三輪山の道しるべの杉もないのに(古今集の歌を引いており、「恋しければおいでなさいなどと言っていないのに」の意味になる)どう間違えて榊さかきなど折っておいでになったのでしょうか。

これに応えて源氏は、

をとめ子が あたりと思へば 榊葉の香をなつかしみ
とめてこそ折れ

あなたのおいでになるところが、神に仕える乙女のおられるあたりだと思ったので、榊さかきの葉の香を慕わしく思って手折ってきたのです。

源氏物語以外にも、サカキの葉の香を詠んだ歌がいくつかあります。しかし、榊さかきの葉にはそんなにいい香りはないようです。したがって、そのころやさらに上代の榊さかきは今のサカキであるかどうかについて諸説があるようです。広辞苑によれば、サカキ(榊、賢木)には、現代でいうサカキのほか、常緑樹の総称、特に神事に用いる木という意もあるようです。もっと香りのよい樹さかきが榊の名で使われた可能性もあるようです。

ヒササカキの葉にも香りはありません。しかし花には悪臭があります。